



前嶋良康部長

療効果も従来と同等かそれ以上」と進歩について話す。前嶋医師によると、前立腺がんは50代から急速に増える男性特有のがん。ステージ2以下は、通院で行う放射線治療と入院が必要な

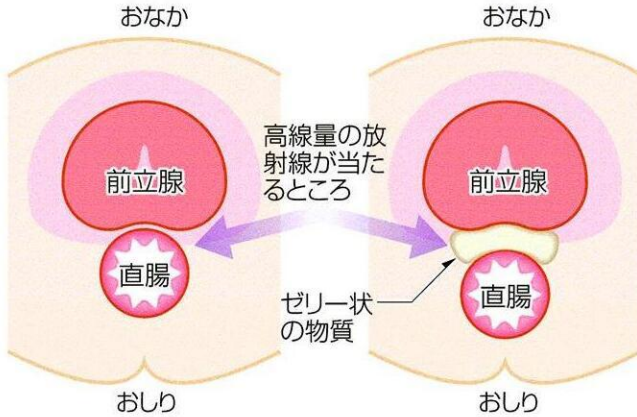
医療最前線 がん治療の今

県立中央病院から

〈233〉

前立腺がんの放射線治療は照射回数が何十回にも及び、通院が患者の負担になると言われてきた。山梨県立中央病院は6月から従来よりも大幅に照射回数を減らす手法を採用。同院放射線治療科部長の前嶋良康医師は「安全性が保たれ、治

スペーサー留置術



(ゼリー状の物質が直腸を高線量域から守る)

高線量、高精度で5回に

前立腺がん放射線照射大幅減

摘出手術の治療効果に差はないとされている。ほかのがんに比べてより多くの放射線量が必要とされ、「かつては38回、1回当たりの放射線量を少し高めることができるようになった近年

でも20回」(前嶋医師)の照射が必要だった。同院が採用しているのは、極めて高い精度で前立腺を捉えて照射する技術(画像誘導放射線治療)と、その形状に合わせて線量を高める工夫を凝らす。前

の線量を格段に抑えることが可能になり、照射回数を5回に減らすことができ。1回当たりの照射時間はわずか2分ほどで従来と変わらず、照射中の患者の負担を増やすこともない。

立腺に接するほど近い場所にある直腸と前立腺との間に針を進めてゼリー状の物質を入れる「スペーサー留置術」を積極的に実施。前立腺と直腸を物理的に遠ざけることで放射線による直腸のダメージを低減させている。この処置には2〜3日の入院を必要とする医療機関もあるが、同院は局所麻酔を採用し、日帰りで行っているという。このような治療法や処置の組み合わせによって、病変にはより高い線量を照射しつつ、周りの正常組織へ

国内で少しずつ普及している最新の放射線治療で、同院に本年度着任した前嶋医師が中心となって導入の準備を進めた。前嶋医師は「山梨県は放射線治療が可能な医療機関が限られている。遠方から何十回も通う必要がなくなった」とメリットを説明。「コロナ禍で通院回数を極力減らしたいと考える患者のニーズにも合っている」と話す。導入から4カ月余りで15人以上の患者が5回照射による治療を受けている。前嶋医師は「科学技術の進歩と放射線医学の発展によって、通院によるがん放射線治療はさらに加速するだろう」と話している。